19 非　　行

家庭のしつけがきびしいといわれるイギリスでも、非行は悩みの種のようだ。ヨークシャーの西部にある町の学校で、荒廃が極限に達し、ついに休校となってしまった。荒れた生徒が 60 人はおり、もはや教育が成立しないのだという。テレビでは、13 歳で子どもを産んだ生徒と母親が紹介されていた。校長と教員との関係も悪化し、ついに校長が辞職することになった。

日本でも、同じような例は、たくさんあると思う。だが、少し違うと感じられたのは、教員組合が、教員の安全と仕事の環境を守るために、はっきりとした発言をしていることだ。女性の教員が生徒に性的な攻撃を受けたことで、組合は断固とした処置を求めた。そして、行政の視察が行われ、報告書がすぐに作成された。すべてがオープンにされ、経過や対応が、だれにでもわかる形で示されているのだ。辞職した校長は、自分の考えをＢＢＣのテレビで明言している。

こういう場合、日本では、すべてが密室で進められる。教師は、生徒の非行を解決する責任が本来はすべて自分たちにあるかのように思いこまされ、持ちきれない荷物を抱え込まされる。生徒から暴行を受けても、自分たちの中で解決しようとする。組合が教師の身の安全を要求してストライキにはいれば、まずまちがいなく非難が集中するだろう。辞職した校長が自分の意見をテレビで発言するなどというのも、日本では好ましくない行動と批判されるかもしれない。そして、矛盾は学校のなかに抱え込まれ、解決が先延ばしにされることになる。日本的な、問題をはっきりとさせない形での沈静化がはかられるのだ。

日本の問題解決のシステムは、伝統的な共同体の方式を色濃く残している。共同体の中の利害の対立を、できるだけあらわにせずに、もっとも不満が少ない形で丸く収めていくというものだ。首長は、いわば職人ワザを発揮して、問題の解決にあたる。それはそれで、たいへんに有効なシステムで、私たちもそのシステムの恩恵に、かなりの程度浴してきたといってもよい。

しかし、社会は共同体ばかりではない。イギリスのように、学校にも多くの民族の子弟があふれ、価値観も多様である社会に、職人ワザの問題解決システ

ムは、もはや機能を発揮できないのだ。それよりも、一定の方法論に基づいた、非職人ワザ的な、合理的な問題解決システムが採用される。意見や利害の対立は、あらわにしないように努めても、もはや無理なことなのだから、むしろ対立をはっきりさせたうえでの解決が求められる。こうした問題解決システムの前提は、オープンであることだ。

日本的な問題解決システムは、均質で小規模な社会では、大きな役割を果たしてきた。しかし、いまや、そのシステムを支える土台が失われてきている。スケールの大きな問題が増え、職人ワザでは、質・量ともに対応できない。問題解決のシステムは、紛争だけではなく、課題の解決という点では、学問の進展や企業の戦略とも関係し、国際的な競争力にも反映してくる。この問題は、これからの日本の社会の大きな課題であるように思う。

さて、問題の学校だが、結果として、多くの生徒の退学・停学処分に踏み切ったようだ。同じようなケースの別の学校でも、親が生徒の転校に合意するということで、実質的な退学となった。もちろん、こうした解決が望ましいというわけではない。問題の生徒や親が名前も公表されて、マスコミの取材を受けるというのも、良いことかどうかわからない。しかし、密室ですべてが運ばれるよりは、ましなのではないかと思う。

1996　新納泉　　著作権フリー